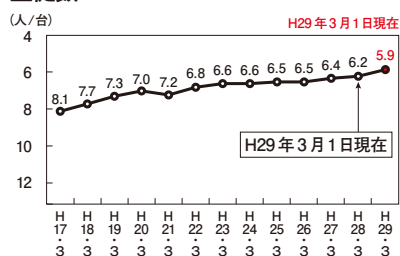


タブレット端末環境 一人1台に向けて

中川一史 (D-project会長)

今回は、ICT環境整備の話をしてします。文部科学省が2017年12月末に公開した「平成28年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（概要）」によりますと、教育用コンピュータのうちタブレット型コンピュータ台数は373,538台となっています。もちろん、まだ十分に整備されていない地域も少なくありませんが、それでもこの3年間で5.1倍に増加しているのです。私が副座長をした「学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議」の最終まとめ（2017年8月）によりますと、児童生徒用のタブレット型コンピュータについては、「3クラスに1クラス分の整備」を提言しています。一律に各校40台では、そもそも大規模校では活用する機会が回ってこないからです。

教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数



(参考) 教育用コンピュータのうちタブレット型コンピュータ台数

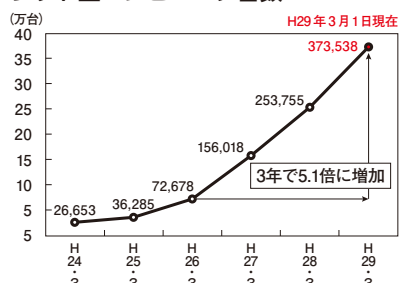


図1：教育用コンピュータのうちタブレット型コンピュータ台数

授業活用で考えると、当然のことながら、ICTはツールであり、使うことが目的ではないからです。これは2002年のD-projectの発足当時からずっと大前提にしていることです。一方で、1台でも多く整備されないと、そのツールにすらならない現実があります。

今後、この「そこ」にあって当たり前状況へのロードマップ（促進への重要キーワード）を考えると、私は図2で示すように、3つの柱があると思っています。

1つ目は、新学習指

新学習指導要領

- すべての教科・領域でのICT活用の明記
→非ICT教材・教具・ツールとの選択・組み合わせ
- 主体的・対話的で深い学びとICT活用
- キーボード入力、小学生プログラミング教育の実施

環境

- 常時一人1台環境への移行
→端末の低価格化（教育用？）
→BYODの普及
- クラウド化
→OSや高機能等に依存しない対応
→情報通信ネットワーク環境の充実
→学習記録データ、校務データとの連動

スキル

- 教員の活用スキル向上
→児童生徒の主体性に応じた授業の改善
→実態に応じた柔軟な対応
- 児童生徒の活用スキル向上
→情報活用能力の向上
→脱・新奇性

図2：児童生徒一人1台タブレット端末環境へのロードマップ

導要領です。新学習指導要領ではすべての教科・領域でICT活用に関する何らかの記述がされただけでなく、例えば、小学校ではローマ字入力やプログラミング教育の実施など、一人1台使うことができないとそもそもできない事柄が並んでいます。ここから多くの教育委員会で整備が加速されることを期待しています。

2つ目は、スキル向上です。これは教員のスキル向上もあるし、児童生徒のスキル向上もあります。これまで学校に入ってきたICT機器（例えばデジタルテレビのような大型提示装置や実物投影機）のように、教室にあっても1台だけで教師が完全コントロールできる機器と、児童生徒一人1台手元にあるタブレット端末はその指導方法や授業での活用が決定的に違います。ここを踏まえた校内での研修などが進んでほしいと思います。

そして3つ目は、環境そのものです。先に述べたように、まずは1台でも増やしていく整備が重要ですが、最終的には、児童生徒一人ひとりのツールになるためには自己所有（BYOD）を検討すべきであると思いますし、また、教育クラウド化を進めていかなければ、例えば学習者用デジタル教科書の配信も難しいと思います。

これら3つは、どれかだけでもうまく進まないと思いますし、そうかと言って他の2つを待たせても進みません。各地域で状況が違いますが、まずできるところから進めてほしいと願っています。

これからの 授業への提言

国立教育政策研究所総括研究官

福本 徹（ふくもと とおる）



主体的・対話的で深い学び

「アクティブ・ラーニング」の3つの視点である「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のうち、「主体的な学び」と「対話的な学び」は分かりやすい視点であるし、子供が主体的に学んでいるか、対話的に学んでいるか、は比較的観察が容易であろう。これに対して、「深い学び」（子供が深く学んでいるか）はイメージがつかみにくし、学びの深まりを欠くと表面的な活動、つまり「浅い学び」や「活動主義」に陥ってしまう危険がある。「活動はしているのだが、つけたい力が明確でない」ような学習活動が時々見られたりする。

「深い学び」を実現するための鍵となるのが教科等の「見方・考え方」である。『答申』においては、「見方・考え方」は、新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結びつけながら深く理解し、社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものである。」とある。

例えば国語科では、①創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面から言葉の働きを捉え、理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを深めること、の3点を「言葉による見方・考え方」として示している。そしてこの「言葉による見方・考え方」を働かせて、言葉で表現された対象に対する理解や表現、自分の思いや考えなどを広げ深めることが国語科の学びであると示している。

「見方・考え方」を働かせて教科等の内容を学び、資質・能力が育成され、「見方・考え方」が更に豊かになる。構成された単元の中で、単元を通して主体的であるか、対話的な要素があるか、深い学びとなっているか、が重要なのである。

新学習指導要領における資質・能力と学習活動

資質・能力の3つの柱と、先に述べたアクティブ・ラー

ニングの視点をもとに、学習活動を設計し、実践することについて考えてみよう。これには、『答申』で示された資質・能力の3つの柱に関する記述が参考になる。知識・技能の習得は断片的ではなくて深い理解につながり、社会における様々な場面で活用できるように、思考力・判断力・表現力は問題発見・解決の過程、集団としての合意形成、意味や価値の創造という過程、学びに向かう力・人間性は学んだことを社会や世界で生かしていくことが実感できるように、という学習活動を組むことが必要となる。

また、『答申』においては、「知識や技能は、思考・判断・表現を通じて習得されたり、その過程で活用されたりするものであり、また、社会との関わりや人生の見通しの基盤ともなる。このように、資質・能力の三つの柱は相互に関係し合いながら育成されるものであり、資質・能力の育成は知識の質や量に支えられていることに留意が必要である」として、資質・能力の3つの柱は独立したものではなく、お互いに重なり合いながら、1つの学習活動で資質・能力をバランスよく育成することが求められている。

他には、アクティブ・ラーニングの視点においても、『主体的な学び』では、「自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」や、『対話的な学び』では、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」など、資質・能力の育成に関わる学習プロセスが示されている。

このような学習活動や学習プロセスを実質的に保証することが大切であって、形式的に「めあて」を示したり、「振り返り」を行うことや、対話を取り入れさえすればよいとか、グループを組んで活動すればよい、ということではない。資質・能力を提示する意味は何なのか、主体的・対話的で深い学びは何をねらいとしているのか、他にも、カリキュラム・マネジメントが意味するところは、社会に開かれた教育課程が目指すところは、といった様々な言葉について、正確な情報を通した理解を心掛けたいものである。

資質・能力を育成するための 授業づくりとは

資質・能力について、国立教育政策研究所のプロジェクト研究（2014）では、「資質・能力育成のための授業や教育課程編成の視点」として、子供の学び方を次の7点にまとめている。

①意味のある問いや課題で学びの文脈を創る

子供は、自分がこれからどのような内容を、何のために学ぶのか、そして何ができるようになるのか、といった学習の目的をつかむことで学びやすくなる。

②子供の多様な考えを引き出す

子供は、生活上の体験や経験による自分なりの考えを持っている。

③考えを深めるために対話のある活動を導入する

②で述べた考えは子供によって違うため、違いに気づいて自らの考えを深めるきっかけになる。単なる「教え合い」や「発表し合い」では、子供は対話による良さを感じにくい。ため、「他人が居ることや対話することで自分の考えを広がり深まる活動」をうまく設定する必要がある。

④考えるための材料を見極めて提供する

そもそもの「学習の問い」に対して子供が考える材料にできる知識や経験がどの程度子供にあるのか、資料やメディアなどで不足分を補うといった手立てが必要になる。

⑤すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する

思考の道具として子供が使う「すべ」や、手立てとしての材料の提供や学習活動の設定が重要なものとなります。単なる訓練ではなく、子供が必要な時に必要に応じて「すべ」を使えることが大切である。

⑥子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

学習過程や成果を子供が意識することが、資質・能力を身に付ける上で重要である。学習の途中で子供が自らの学びを自覚することは、子供が全力で学んでいるときは

ど難しく、そのために学び方を振り返り自覚する機会が必要である。

⑦互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

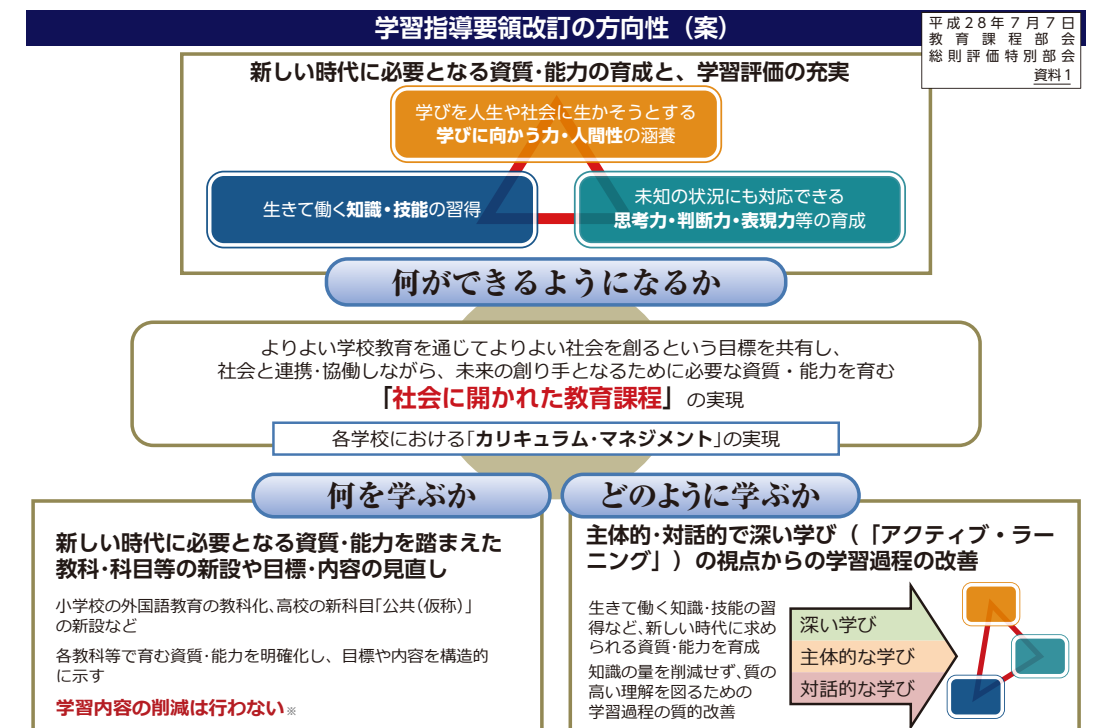
多様性を認める文化が学びの中にあれば、子供同士での考えの違いが認められ、それとともに、考えを変えていくことが認められやすくなる。考えの違いが争いや優劣ではなく、考えの違いによって学びが深まることがありうる、ということである。

まとめ

新学習指導要領では「何を学ぶか」としての学習内容、「どのように学ぶか」としての「主体的・対話的で深い学び」の視点、「何ができるようになるか」としての資質・能力の育成、この3つが肝である。これらをつなぐ学習活動をどのように設定するかが、深い学びの実現や資質・能力を育成するために最も重要なことである。

中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』、中教審第197号。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm

国立教育政策研究所（2014）『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 7 資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理』。



※高校教育については、些末な事実的知の論記が大学入学選抜に関わることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整備等を含めた高大接続改等を進める。

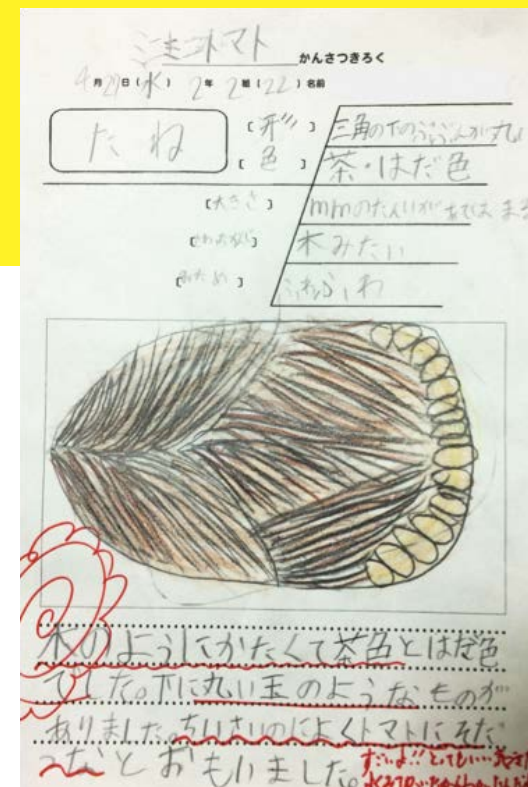
メディア創造力—授業デザインのつぼ

教師が授業デザインする際の12の着目要素は、新学習指導要領が強調する「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善のための、有効な手立ての1つになると考えます。第2回目は、さとい学園でバリバリと実践を積んでおられる山中昭岳先生にお願いしました。



目に見える形で表すことができるように、ベン図のような思考ツールを活用します。このベン図を活用することで、違うところと同じところが明らかとなります。共通点として見出されたところが自分のパンフレットづくりに活用していくものとなります。そして、違いとして見出されたものは活用しないというわけではなく、自分の伝えたいことや伝える相手に応じて似ているものを選べばよい。このように分析的にみていくことによって本物に迫る眼を養っていくのです。

やはり本物に迫る眼を養うためには、本物に触れることです。これは当たり前のことなのですが、ただ触れるだけではなく、「迫る」ことをするためには、上記のようにその対象を分析的に見ていくことが必要です。それは考えるということ具体的な行動レベル（ここでは「比べよう」）に言い換えて指導していくことがしかけとなっているのです。これは、体験で得られた情報を可視化し、整理・分析するためのツールであり、そこから新しい気づきを生み出すことができます。本物との出会いは、ただすごいだけではなく、新しい知識の獲得や技の習得、そして新しい自分に気付くことへと導いていくことなのです。



図：生活科の観察用ワークシート。くま手図で子ども自らが見出した視点で観るしかけとなっている。

かし、この「よくみて」とはいったいどういうことをすればよいのでしょうか。

ミニトマトの種を観察する学習の場面において、その様子を絵で表すときに「よくみてかきましよう。」の指導だけでは、ゴマほどの大きさの種を小さな丸をかいて黒く塗りつぶしてしまうだけの絵になってしまうでしょう。

そこで、いくつかの方向からみる視点を与えます。例えば、「形はどうなっているのだろう」、「色は一つの色だけかな」など具体的な言葉で示すのです。こうすることで、小さな丸を黒く塗りつぶしただけの種の絵にはなりません。

そして、このことを目に見える形で残すために、くま手図という思考ツールを活用します。これは

5つの視点でものごとをみる、すなわち多面的にみるために活用するツールです。くま手図により強制的に5つの視点からみなければならないというしかけをしているのです。くま手図に書く視点ですが、はじめは教師側から視点を与えるのも方法です。

そして、慣れてくると子どもたち自らが視点を見つけていきます。左図を書いた児童は、種を見る視点として、形、色、大きさ、さわった感じ、見た目、といった視点を自ら見出し、その視点で見えていくことで小さいゴマのようなミニトマトの種をその特徴を捉えて描くことができるようになりました。ここでもう一つポイントとして、さわった感じが視点として書かれている点です。目で見た感じだけでなく触覚があることで、絵にその表現がでてきたり、また新たな気づきが生まれやすくなることへとつながっていく。

このように視点をもつことによって、思考に制限をかけることとなり、ものごとを捉えるときに多面的にみることができ、より深いところに気付くことができるようになるのです。

さとい学園小学校 山中昭岳

12の着目要素とは!!

D-projectがこれまで積み上げてきた授業を分析したところ、教師が授業デザインする際に、意図的なしかけがあることが見えてきました。

その共通のしかけを、以下のような「12の学習要素」としてまとめました。

- ① リアルで必然性のある課題を設定する
- ② 好奇心や探究心、発想力、企画力を刺激する
- ③ 本物に迫る眼を養う
- ④ 自分なりの視点を持たせる
- ⑤ 差異やズレを比較し、実感させる
- ⑥ 映像と言葉の往復を促す
- ⑦ 社会とのつながりに生かす
- ⑧ 建設的妥協点に迫る
- ⑨ 失敗体験をうまく盛り込む
- ⑩ デジタルとアナログの双方の利点を生かす
- ⑪ メディア創造力を追究する中から基礎・基本への必然性に迫る
- ⑫ 自らの学びを振り返らせる



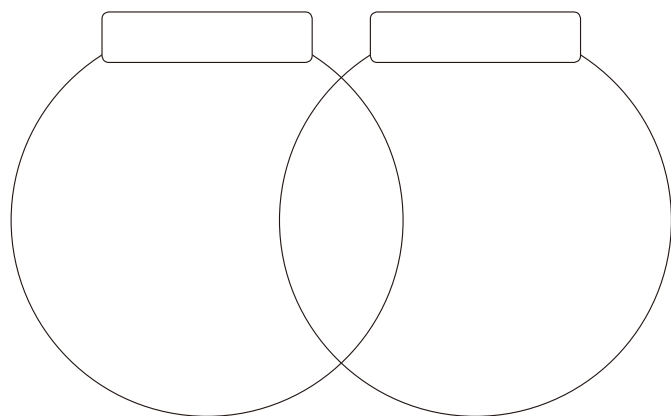
12の着目要素：③

本物に迫る眼を養う

前回の掲載において事例紹介された第6学年国語科パンフレットづくりの学習では、相手意識や目的意識を明確にもつことでメディア創造力の①、②の学習要素をデザインできることが書かれてありました。今回この単元から「本物に迫る眼を養う」ためのしかけを紹介します。

パンフレットは伝えるツールです。しかし、ただ自分の伝えたいことを書いていけばよいというものではありません。見る人に“効果的”に自分の言いたいことを伝えなければなりません。この“効果的”なものを獲得するために、実際使われているパンフレットを対象として分析するのです。

授業では、前回も書かれてありましたが、本物のパンフレットをいくつか準備することです。そして、ただ「じっくりみて考えなさい。」ではなく、「くらべてみよう。」という比較する視点を与えます。さらに比較が



図：ベン図。それぞれ特有のものはそれぞれの円に、重なっているところには共通点を書く。

12の着目要素：④

自分なりの視点を持たせる

生活科の植物や生き物の観察をする場面において、その様子をえがくときに「よくみてかきましよう。」という指導がされがちです。じっと見てその特徴をとらえ、それを絵に表すことをねらいとしている言葉かけです。し

学級歌づくりから 広がる世界

愛媛県松山市立北久米小学校
小田浩範 (おだ ひろのり)

今回は、松山支部からの報告です。学級歌づくりプロジェクトにおける実践です。小学校2年生でも無理なく作詞・作曲・伴奏づくりに取り組めるよう工夫し、学級全員が関わった協働的な音楽制作に取り組みました。さらに、学級歌を発信してたくさんの人に聞いてもらう活動にも取り組みました。「誰に」「どのように」発信するのか等、子どもたちの発案や思いを起点に学級みんなで話し合っ

1 学習のゴール

作曲・伴奏づくりと歌詞づくり(1～3番)を役割分担し、学級全員が制作に関わって、「自分たちの歌」という思いをもてる学級歌を完成させる。さらに、相手に応じた方法で学級歌を発表・発信する。



2 学習のゴール

他者と協働しながら、主体的に問題解決する力。

3 メディア想像力を高める学習プロセス

●指導計画 (全 12 時間)

時	ねらい	主な学習活動 (○)と内容 (●)
1	相手の考え方の良さや共感できる点を相手に伝えることができる。【D - 1 - Lv 1】	○学級目標をつくる。 ●全員で話し合い、学級目標を決める。
2 5 5	それぞれの考えの相違点や共通点を認め合いながら、相談することができる。【D - 1 - Lv 2】	○作曲して、伴奏をつくる。 ●節遊びから、メロディーをつくる。●タブレットで音を重ねて伴奏をつくる。 ○言葉を集め、歌詞をつくる。 ●歌集や歌から使えそうな言葉を集める。●学級目標に合わせて、歌詞をつくる。(グループ別に同時進行)
6	それぞれの考えの相違点や共通点を認め合いながら、相談することができる。【D - 1 - Lv 2】	○レコーディングする。 ●タブレットでレコーディングする。
7 5 12	課題に対して、相手意識・目的意識をもって主体的に取り組むことができる。【A - 3 - Lv 3】 制作物には、人を感動させる魅力があることを理解できる。【B - 3 - Lv 1】 他者との関わり方を振り返り、感想をもつことができる。【D - 3-Lv 1】	○様々な方法で発信する。 ・校長先生に……教室に招待して・音楽の先生に……音楽室で。●全校児童・先生に……校内放送で。●懇談会に来た保護者に……動画で。●地域・その他大勢に……学校Webで。●保護者に……参観日に発表して。

●実践の流れ

作曲・伴奏作り

まず、鍵盤ハーモニカを使った節遊びで作曲を行った。2人ずつの4グループに分かれ、付箋紙に書いた8つの○に階名を入れ、2小節ずつ作成した。さらに、似たものや繰り返しを意識してもう1枚ずつ作成し、合計8枚(16小節)をつくった。そして、曲らしくなるように付箋紙を並べ替え、メロディーを完成させた。

次に、iPadのGarageBandを使って伴奏づくりを行った。コードは教師が付けておき、1台のiPadをグループ全員が囲んで、SmartDrumsなどの自動伴奏の中からイメージにぴったりの音色やリズムを選び、コード進行に合わせ

たタップ操作で音を重ねていった。初めて曲づくりに取り組む子どもたちも、無理なく楽しみながら取り組むことができ、高い完成度が得られた。



頭を寄せ合っ

歌詞作り

ホンモノの歌から学ぼうと、言葉集めから開始した。歌集から、テーマ(学級目標)に合いそうな言葉を見付け、付箋紙にたくさん書き出していった。歌詞づくりでは、「この言葉はどう?」とその付箋紙を示しながら、話し合

いを進めていった。メロディーに合っているか試しに歌いながら、1～3番までをそれぞれのグループでつくっていった。子どもたちは、互いの意見を大切にしながら話し合い、歌詞を完成させた。

発信活動

最初に発表したのは校長先生。音楽を専門にしている校長先生に、子どもたちは完成前から聞いてもらいたいという思いをもち続けていた。緊張しながら校長室に行き、教室へ招待した。つくっている様子を動画で紹介したり歌詞に込めた思いを説明したりした後、実際に歌って発表した。感想をもらうだけでなく、「校長先生にも教えて」と言ってもらって一緒に歌い、子どもたちは大満足だった。

その後も、様々な人に聞いてもらおうと、子どもたちが相談し合い活動を進めた。音楽の先生には発表しただけでなく、歌唱指導もしてもらった。また、全校の児童や先生にも聞いてもらいたいと、校内放送にリクエスト曲として応募した。さらに、家族やその他大勢の人にも聞いてもらいたいと、学校Webに曲がダウンロードできる記事として掲載した。最後には、やっぱり直接声を届けたいという

子どもたちの願いから、参観日に保護者に発表することになった。

学級歌をつくっただけでなく、それを聞いてもらうために活動したこと、そして、たくさんの人の感想を聞いたことで、学級歌が「自分たちの歌」という思いが一層強くなった。さらに、活動を通して、自分たちで考え行動し関わる世界を広げることができた、という大きな達成感を味わった。



緊張の発表会

4 メディア創造力育成はここで

音楽制作段階では、協働的に取り組むことで曲が仕上がっていくという経験をし、到達目標D-1「建設的妥協点を見出しながら議論して他者と協働できる」に迫ることができた。さらに、発信する活動においては、自分たちの思いや願いを実現するために、考え、相談し、行動する主体的な姿が見られた(A-3)。また、多くの人に聞いてもら

い、感想をもらう中で、自分たちのつくった歌のすばらしさを再認識していった(B-3)。さらに、聞いてもらった人との関わりを振り返ることができた(D-3)。このように、学級歌を発信していくことで、Dだけでなく、AやBの項目にも迫る姿を見ることができた。

My Best プラクティクスで賞



Webで広がる新しい学びの創造

——創立100年のあゆみをまとめる活動を通して——

(第5・6学年社会科・総合的な学習の時間)

久万高原町立明神小学校

中野 圭一郎 (なかの けいいちろう)

1 学習のゴール

学校Webページを活用して、情報収集・アドバイスを得てあゆみをまとめ、記念式典で発表を行う。

2 身につけたい力

- 創立100周年の年度の高学年として、式典に向けて主体的に取り組もうとする態度を育てる。
- 身近な人や学校Webなどから得た情報を整理・比較し、伝えるべき内容を考えることができる。
- 相手を意識し、伝えたい内容を明確にしながら文章で表すことができる。
- 学校Webのアドバイスを受けて、次の活動にどのように活かすか具体策を考えることができる。

3 メディア想像力を高める学習プロセス

●指導計画 (全 25 時間)

時	ねらい	主な学習活動〔○〕と内容〔●〕
2	式典でのあゆみの発表に向けて、目的意識や相手意識を持つことができる。 【A - 3 - Lv 3】	○式典での発表に向けて、学習計画を立てる。 ●90周年時に使われた資料を見て、発表のイメージをつかむ。 ●式典の概要を知るとともに、発表方法や調べ方を確認する。
8	発表に必要な情報を様々な情報源から集めることができる。 【A - 2 - Lv 2】	○グループで協力し、写真や図書資料などを調べる。 ●学校に保管されている写真や図書を活用し情報収集する。 ●保護者や地域の方にインタビューなどをして情報収集する。
2	収集した情報をもとに、発表原稿への表し方を知る。 【C - 3 - Lv 2】	○講師の方の話を聞く。 ●講師の話を聞いて、発表するときに注意する点をまとめる。
3	情報を整理し、伝えるべき内容を考えることができる。 【C - 1 - Lv 3】	○中心となる話題を決め、原稿を書く。 ●グループで一番伝えたい出来事を中心話題とした構成の発表原稿を書く。
3	自分たちが伝えたい内容に応じて、表現内容を考えることができる。 【C - 1 - Lv 3】	○不足する情報を追加し、発表内容に合う写真を選択する。 ●原稿を学校Webに掲載し、アドバイスを依頼する。 ●学校Webに寄せられた情報を取り入れ、原稿を修正し、内容に合う写真を選び出す。

2		○書き上げた原稿を読み合い推敲する。 ●グループで相談し、伝える相手に分かりやすい原稿となっているか話し合う。
2	アドバイスを受けて、どのように伝えればよいか考えることができる。 【D - 2 - Lv 2】	○アドバイスをもとに原稿を修正する。 ●学校Webに寄せられたアドバイスをもとに原稿を見つめ直す。
3	学校Webでの関わりを振り返り、感想を持つことができる。 【D - 3 - Lv 2】	○式典で発表する。 ○活動の振り返りをする。 ●学校Webを活用した活動について具体的に記述する。

4 メディア創造力育成はここで

創立100周年を記念する年度の高学年として、自分たちに何ができるかを考えさせ、実行させた。100年のあゆみをまとめていく際には、過去の写真は探しても見付からないことが多く、子どもたちはないからこそ別の写真や原稿で伝えようと試行錯誤した。伝えたい内容にふさわしい写真を、違う時代や現在の写真から関連付けるなど、より深い学びを展開することができた。

学校Webを活用し他者と関わる中で、より広い視点で原稿を見直し、「分かりやすい」とは伝える相手が感じるものであると気付いた。グループ内や学級での話し合いにおいても「伝わるかなあ」という

声が聞かれるようになり、常に相手を意識した活動となった。また、情報提供や原稿アドバイスなどに協力して下さった方との関わりから、自分たちだけでは100年のあゆみをまとめることはできなかったと、協力の大切さを学ぶことができた。



Webでの投稿を見る



本校のWebページ

[審査員からの講評]

中野先生は、古くからのDメンバーの一人です。子どもたちに「メディア創造力」を育成することの必要性を十分に理解され、その学びのプロセスをしっかりと設計され

ています。学校Webを授業で活用し、教室空間や時間を超えた学びの創出を試みた実践として、高く評価したいと思います。

「My Best プラクティクス」募集!

次号からも、「My Best プラクティクス」募集! ~あなたの実践をD-PRESSで紹介しませんか?~ を引き続き実施いたします。実施要項は、「デジタル表現研究会」のWebにある「D-PRESS Vol.4」をご参照ください。募集時期に関しましては、D-allにてアナウンスいたします。「主体的・対話的で深い学び」のある「メディア創造力」を育成する授業づくりに、ぜひチャレンジしてください。新鮮な発想を期待しております!



D-projectプロジェクト2017

「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためにはどうすればよいでしょう。

D-Projectでは「メディア創造力の到達目標」を設定し、この学びを実現するためのプロジェクトを行っています。

プロジェクトに参加し、「主体的・対話的で深い学び」を実現してみませんか。

プロジェクトは、「メディア創造力の到達目標」の4つの観点がすべて網羅されています。

下記の表は、各プロジェクトの特徴を示した観点別に整理・分類されています。

この分類表をもとに、ご自分の実践に合ったプロジェクトを選び、参加してみましょう。

	A 課題を設定し 解決しようとする力	B 制作物の内容と 形式を読み解く力	C 表現の内容と 手段を吟味する力	D 相互作用を 生かす力
寺子屋リーフレット制作	◎		○	
プログラミング教育	◎			
iTunesUコース	◎		○	
ポケタッチ		◎		
新聞教材活用		◎	○	
デジタルリーフレット		○	◎	
フォトポエム	○		◎	
学校Web			◎	
コラボdeカルタ			○	◎
学級歌づくり				◎
発信! わたしのまちのたからもの	○		○	
英語デジタルコミュニケーション	○		○	
国際協働学習の設計と評価	○		○	
NHK for School	○	○		

寺子屋 リーフレット制作 プロジェクト

プロジェクトリーダー：
水谷浩三
(暁学園暁小学校)

今年度も全国22校2000名程度の児童、生徒が参加して計画通りにプロジェクトが実施されました。参加校種は、高等学校、中高一貫校、中学校、小学校、インターナショナルスクールと多彩な顔ぶれが集まりました。各校ともに世界寺子屋運動のリーフレットを制作するだけでなく、独自のボランティア活動を展開して地域社会とつながる活動となりました。学年末には地域のユネスコ協会を招き、募金や書きそんじハガキの寄付も行う活動報告会が開催されるでしょう。

参加した子供達の学びが深まっただけでなく、参加校の協力で今年度もカンボジアに寺子屋を建設できそうです。皆様、ご協力ありがとうございました。

プログラミング 教育プロジェクト

プロジェクトリーダー：
小林祐紀
(茨城大学)

今年度からスタートした本プロジェクトでは、小学校プログラミング教育の体系化の第一弾として、メンバーが授業を考え、実践し、結果を交流してきました。夏には、関東メンバーを中心にして集まり、学習会を開催しました。金沢側においても、複数回、実践内容について議論を重ねてきました。その結果、約40の実践を行うことができました。

そして、プログラミング教材を活用した実践、プログラムの良さを活かした実践、プログラミング的思考を活用した実践等に類型化し、2018年4月に書籍（タイトルは執筆時点で未定）を刊行することができそうです。来年度もぜひプロジェクトを継続し、カリキュラムの作成や指標づくりといった次のレベルに舵を切り、進めて行く予定です。



考え方を可視化し学習に取り組む児童

新聞教材活用 プロジェクト

プロジェクトリーダー：
海道朋美
(金沢市立田上小学校)

本プロジェクトは、「学びの宝庫」である新聞記事を学びの素材とし、短時間での継続的な学習や国語科及び総合的な学習の時間などでの学びを活かすことで、児童・生徒が「読解力・要約力・批判力」を身に付け、「発信する力」を高めることをねらいとして本年度スタートしました。

本新聞教材をどのように活用できるか、メンバーそれぞれが授業設計を考え、実践・評価を繰り返していきました。また、春、夏、冬3回のオフ会を開催し、本新聞教材の活用方法について吟味検討を行いました。例えば、朝学習などの短時間の継続的活用では、基本的な読解力や考えを書く力の育成、スピーチの素材として話す力を高める実践事例が報告されました。さらには、教科との関連や情報活用能力の育成においてもその可能性を感じています。

*本プロジェクトは、理想科学工業（株）と朝日学生新聞社から学習素材の提供を受けています。



新聞ワークシートに取り組む子ども

デジタル リーフレット プロジェクト

プロジェクトリーダー：
菊地 寛
(浜松市立雄踏小学校)

本プロジェクトは、動画、写真（複数）、音声、文章と組み合わせたデジタルリーフレットをグループで作成するプロジェクトです。今年度は、伝える目的に応じて、動画や画像、音声、文章などの表現手段の選択・組み合わせることに力をおいて実践を行いました。そのために、メディアの特性を学習する時間を設け、メリットやデメリット、撮影の仕方などを事前に学習をしました。

その結果、デジタルリーフレット作りの際に、動画、画像を児童自ら選択できるようになりました。紙媒体では表現できないような、動画が入っていたり、複数の画像を一箇所に取り込んだりと創意工夫されたデジタルリーフレットが出来上がりました。



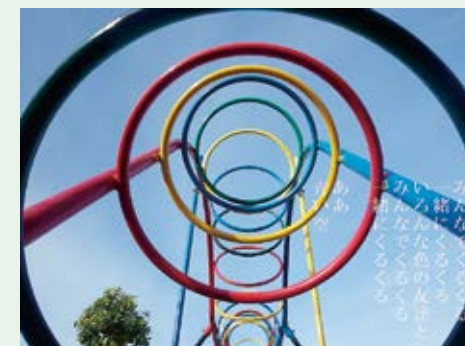
画像選択をする児童たち

フォトポエム プロジェクト

プロジェクトリーダー：
石田年保
(松山市立椿小学校)

本プロジェクトは、写真と言葉を組み合わせた「フォトポエム」という詩を、写真と言葉を往復させながら創作していく中で、言語活動の充実をめざすプロジェクトです。アンケート結果から、「写真撮影」「詩の創作」「写真と詩の組み合わせ」のどの活動場面においても90%を超える児童が、よく考えながら活動していることが分かりました。

また、80%以上の児童が、自分の作品がよくできたと感じていることも分かりました。毎年行っているフォトポエムコンテストでは、愛媛・高知・徳島・大阪・千葉・金沢の小学校や高等学校から、優れた作品が集まっています。今年度も、第8回目のコンテストを実施します。今後も、フォトポエムの活動を全国に広げていきたいと思っています。



6年生児童作品

学校Web活用プロジェクト

プロジェクトリーダー：
佐藤幸江
(金沢星稷大学)

本プロジェクトは、子どもたちの学びのプロセスにおいて、学校Webを有効活用することがねらいのプロジェクトです。昨年度1年間のプロジェクトを通して、様々なハードルが存在することが明らかになりました。けれども、学校Webを活用することで、地域社会との結びつきが強くなること、映像と言葉の往復を組み込んだ学習活動が可能であることなど、D-proが追求する学びの要素が確認できました。

そこで、2017度も、学校Webを他校や保護者・地域の方々との教室空間を拡大した協働学習に活用する実践に取り組んでいくこととしました。この事例ように、「Web上でアイデアのよさを競う」という学習のゴールを示すことで、子どもたちの情報収集や表現の意欲づけにするという活用。ちょっとしたアイデアだと思えます。他にも、Web活用を通じた教室空間を拡大した協働学習において、多様な他者の価値観との出会い、他者を受け入れる柔軟性、違いを乗り越えて理解し合うためのコミュニケーション能力等、多くの学びの可能性が見えています。

ただ、課題も大きいものがあります。インターネットにつながることができるようになってそのネット環境が脆弱な状況であったり、自治体のセキュリティが厳しいため外部とのリアルタイムな交流ができなかったりする学習環境に関する課題は、残されたままです。また、長期に渡るダイナミックな学びになるために、教師の授業力が問われています。

5年生社会科「わたしたちの生活と工業生産 自動車をつくる工業」

単元のまとめとして「未来の自動車を考えよう」という取り組みにおいて子どもたちが考えた未来の自動車を学校Web上でコンペをするというもの。コンペといっても、学校Webのシステム「よい」の評価を活用しての投票ですが、



口コミで広がり、児童数以上の投票がありました。写真はWeb上での投票できるシステム

コラボdeカルタプロジェクト

プロジェクトリーダー：
加藤勝也
(鎌倉市立山崎小学校)

まだ実践途中ですが、今年度の実践を通して以下のような成果と課題がみられました。

成果①として、カルタ制作やブラッシュアップの活動を通して、「これはどうしよう?」、「こんな風にしてみたら?」などのやりとりが多くみられ、建設的妥協点を探る様子が多く見受けられました。

次の成果②として、教科との関連を見直し、単元構成を再構築することで、教科横断的な学習活動に整理することができました。

一方、課題①として、ブラッシュアップから参加するクラスの児童（1年生）のモチベーションの高め方や学習への必然性の持たせ方を模索する必要性がありました。このことは学期末の質問紙をもとに検証していきます。また課題②として、カルタに表現する内容を発達段階に合わせて設定することが必要だと思われます。今後はカルタに表現する内容を校区にも広げるなどしていきたいと考えています。



絵札の制作（情報交換）

学級歌づくりプロジェクト

プロジェクトリーダー：
山本直樹
(関西大学初等部)

学級歌づくりプロジェクトも、今年で4年目を迎えました。この間、京都での実践がICT夢コンテスト文部科学大臣賞を受賞したり、iTunes Uで教材を共有する取り組みをスタートしたりするなど、さまざまな成果を残してきました。

また、浜松ではヤマハ株式会社と産学連携した取り組みを行って積極的に情報発信をしています。ただ、これまでの学級歌づくりは中・高学年での実践ばかりでした。

そこで、さらにプロジェクトの可能性を探るべく、今年度は低学年でも実践研究を行いました。その結果、愛媛県松山市立北久米小学校の2年1組で学級歌を、そして関西大学初等部の2年生で学年歌を完成することができました。

これで低・中・高すべての学年での学級歌づくりのレシピ! がそろいました。来年度は、どの地域でどんな素敵な歌が出来上がるか、とても楽しみです!



友達と話し合って言葉を選んでいく作詞活動

発信! わたしのまちのたからものプロジェクト

プロジェクトリーダー：
前多香織
(江別市立大麻泉小学校)

本プロジェクトは、子どもたちが課題意識と相手意識をもち、主体的・対話的に学ぶ合うことをねらいとしています。自分の住む地域の魅力について、他地域に住む友達に伝え合う学習活動を通して、思考する力や表現力、情報活用能力を鍛えることができます。今年度は、北海道と沖縄の子どもたちが取り組みました。5年生の国語、「町じまんを一つ選んで、すいせんしょう」の単元で、お互いの町のよさについて、テレビ会議システムを用いて交流が行われました。

また、5年生の社会、「暖かい地域、寒い地域」の単元で、お互いに気候の特徴と暮らしや工夫について伝え合い、学び合ったことが報告されました。

英語デジタルコミュニケーションプロジェクト

プロジェクトリーダー：
栄利滋人
(仙台市立大野田小学校)

ネイティブ音声を活用したiPadのKeynote教材を作成・活用し、英語表現のインプットを手軽に授業で行いました。英語表現を使う機会として、英語の自己紹介をScratchに音声ファイルでまとめることに挑戦しました。イギリスの小学校とScratchで交流し、互いの作品を見合い、自己紹介を追加したり、修正したりしながらデジタルコミュニケーションが実現しました。



英語の自己紹介を音声ファイルにしてScratchで交流

国際協働学習の設計と評価プロジェクト

プロジェクトリーダー：
清水和久
(金沢星稷大学)

iEARN (<https://iearn.org/>) のテディベアプロジェクトに参加（5校9クラス）。交流国は台湾5、スペイン1、アメリカ2、イスラエル1でした。9月から、お互いにぬいぐるみを大使として送りあい、そのぬいぐるみの目から見た互いの国の文化を紹介する活動を行いました。特に小学校英語科では英語で習うセンテンスを使って、自己紹介や学校紹介、地域紹介のビデオの作成し、また外国の友達とベアを決めてカードの交換なども行い、英語を学び、活用する効果を感じることができました。

これは相手が実在するからできた活動です。教師はこのプロジェクトを学びのペースとして活動することで、子供の伝えたい、表現したいという思い膨らませることができ、メディア表現力の育成につなげることができました。

NHK for Schoolプロジェクト

プロジェクトリーダー：
福田 晃
(金沢大学附属小学校)

月に1度行われている石川県授業デザイン研究会の一部で、NHK for Schoolを活用した実践の交流を行ってきました。日常的にNHK for Schoolを授業で活用しているメンバーは少なかったため、3つのステップ（ステップ1：一時間の授業の中でNHK for Schoolを活用する、ステップ2：単元の中で複数NHK for Schoolを活用する、ステップ3：メディア創造力を育成するための単元設計の中にNHK for Schoolを位置付ける）をもとに進めました。約半年間で、大半のメンバーがステップ2まで到達することができました。

けれども、メディア創造力を育成するための単元設計の中にNHK for Schoolを位置付けた実践はまだ十分に行われておりません。今後は、ステップ3を目指した活用事例について追求していくこととします。



番組を視聴する児童

プロジェクト参加募集中!

一緒に授業デザインを考えていきませんか?



プロジェクト、
MLへの参加に関する
お問い合わせはこちらまで

●D-project事務局

TEL 043-298-3401（放送大学中川研究室内：村田直江）

URL <http://www.d-project.jp>

各支部情報 ただ今、定例会中

1学期、学級の子どもたちの資質・能力は、先生が思い描いたように伸びたでしょうか。
夏休みは、自分の学級や授業を見つめ直し、学級経営や授業づくりを再構成する時間をとることができます。
その改善の視点を、D-proの各支部の研究会に参加して、ゲットしていただければと思います。
きっと、先生方の専門性を磨く上で、重要な視点を与えてくれる研究会ばかりだと思います。

▶ 松山支部

D-project松山支部では、フォトボエムの実践研究を中心に活動を行っています。今年度は、写真と俳句を組み合わせたフォト俳句の実践が行われたり、フォトボエムの評価プロセスに関する研究が進められたりと、一歩一歩着実に研究を進めています。フォトボエムコンテストも今年で8回目を迎え、コンテスト入賞作品は地域ケーブルテレビで番組として放送されます。また、毎年、中川先生・佐藤先生をお招きして行っている情報教育研修会は、今年で12回目となりました。茨城大学の小林先生や鳥取県の岩崎先生にも来ていただき、約230名の先生方が参加する会となりました。参加者の97%の人が満足する充実した熱い研修会となりました。

石田年保（松山市立椿小学校）

▶ 金沢支部

今年度、金沢支部は10周年を迎えました。年間テーマを「主体的・対話的で深い学びを実現する授業デザインの追求」とし、8月にはD-project金沢2017第10回記念大会を開催。文部科学省生涯学習制作局・安彦広斉氏、中川会長、佐藤副会長をお招きし、講演、15本の実践発表、100名の参加者とともに学びを深めることができました。12月には金沢大学授業力向上ゼミ・石川県教育工学研究会・金沢星稜大学子ども学科（ひよっこ会）と共催で、冬の特別セミナーも開催。

山口真希（金沢市立大徳小学校）

▶ 香川支部

香川支部では、学校放送番組を活用した授業、プログラミング教育を意識したワークショップや授業を中心に研究を進めています。また、平成30年8月12日（日）「D-project香川 メディア教育研究会 夏季セミナー」を開催します。今年のセミナーは、第5回の記念大会となります。

増井泰弘（丸亀市立郡家小学校）

▶ 熊本支部

平成29年度の熊本情報研は、レクチャー+ワークショップという今の運営形態になってちょうど10年目【次期学習指導要領に備える】というテーマを掲げて、アクティブに学んでいくことにしました。われわれ教師自身が資質・能力を向上させ、コンピュータやタブレット端末などに関するICTの知識や技能も活動を通してブラッシュアップさせてくような内容にしたわけです。後期は、「～社会に開かれた教育課程～」をサブテーマとし、特に12月例会は「【未来を考えるプレゼンテーション】異業種交流で三つの資本を増やす」とし、異業種の方々にプレゼンをしていただき、それを見て私たちが学ぶ機会とした特徴的な例会でした。

熊本大学情報教育研究会ブログ
<http://jugyoukenkyu.cocolog-nifty.com/kumajouken/>

山口修一（熊本市立弓削小学校）

▶ 高知支部

四国のD-projectは「4D-project」。四国のD-projectで連携し、新しい次元「Dimension」でのICT活用を目指して行きたいと考えています。D-project高知では、高知県西部・中部・東部の3地域での研究会開催を目標に、公開授業・ワークショップ・講演の3本立ての構成で多様な知識と実践をシェアできるよう取組を進めています。小規模な研究会ですが、高知県内外から多くの同志が集まり、大きなうねりが起こることを期待しています。皆さまのご参集をお待ちしています。研究会情報（随時掲載）：<http://kitkat.sblo.jp/>

若林 章（高知市立高須小学校）

▶ 関西支部

3月24日、D-project公開研究会がまた京都の地で開催されます。この公開研究会、関東から関西の地へ舞台を移して3年目となります。今年の冬は例年より寒いので、3月末の京都にもまだ春は来ていないかもしれません。でも会場となる左京区の同志社中学校だけは、熱い実践バトルが繰り広げられること間違いなしです。関西からの実践発表は、関西大学初等部2年生の学級歌づくりについて紹介いたします。生活科における自然観察活動とリンクさせた歌作り実践です。もちろん全国各地のメンバーによる実践発表も聞き応えバッチリです。ぜひこの春休みは、京都へお越しください！

山本直樹（関西大学初等部）

▶ 東海支部

D-pro東海は、2018年で4年目を迎えます。2018年1月13日には、4度目のセミナーをEXPO浜松（内田洋行、遠鉄システムサービス主催）と共同で開催しました。セミナーのテーマは、「タブレットによる学びの自立」として、午前中は、歌、音楽作り、思考の整理のワークショップ、午後はEXPO浜松の中でD-pro枠として実践発表を行いました。共同開催は、初めての開催でしたが、D-proについて多くの方に知ってもらい機会になりました。これからも新しい試みをして、セミナーを盛り上げていきます。そして、音楽の街「浜松」にふさわしいセミナーを企画していきたいと思います。

菊地 寛（浜松市立雄踏小学校）

▶ 北海道支部

北海道で個々に活動していた4つの大きなICT活用研究団体をひとつにまとめ発足した「D-project北海道」。順調に軌道に乗り、すでに設立10周年以上、ワークショップセミナーは20回。当初のキャッチフレーズは「東京に行かなくても札幌で全国の最新教育情報が手に入る!」でした。まさに時代の最先端を中川・佐藤両先生に津軽海峡を越えて運んできていただきました。夏のワークショップセミナーでは、最先端のプログラミング教育と特別支援教育のICT活用について全国初となる内容で展開。1月に行われた冬のワークショップセミナー（北海道メディア教育研究会共催）では、授業作りについてD-projectスタート時のようなアンブレグドな授業作りワークショップを中心に最先端のプログラミングワークショップを織り込んで開催しました。また、両セミナーとも文部科学省から講師を派遣していただき、まさに次世代の教育のねらいに焦点を合わせたお話をしていただき参加者にとっても刺激になりました。今後も若手育成にも力を入れていきますので、向上心のある方を大歓迎します。

加藤悦雄（北広島市立双葉小学校）

▶ 茨城支部

D-project茨城が誕生して2年が過ぎました。毎月テーマを変えて定例の研究会及び年に一度の大きな規模の研究会を開催。合計の22回の研究会を通じて、茨城には素晴らしい人材がたくさんいることを再認識しました。2月には誕生2周年記念研究会を開催し、中川会長や岩崎副会長の他、県教育長、笠間市教育長にも来て頂き、参加者の皆さんと有意義な時間を過ごすことができました。来年度も、「ICTに振り回されずに授業を見つめる」というD-projectの精神を大事にし、茨城県教育工学研究会との共催で学習会を行う予定です。参加者の多様性を大事にし、ゆるやかにつながる共同体でありたいと願っています。

世話人代表：村野井均、世話人：小林祐紀ともに茨城大学教育学部

▶ 関東支部

2017年度のD-pro関東sproutは、「まずは、授業力をあげよう」をテーマにし、「D-proの学び続ける姿勢を学ぶ、若手育成」を目的に活動してきました。年度初めのスタート時には、中川会長、佐藤副会長などによる鼎談から、授業づくりの肝を学びました。自らの学校教育現場での長年の経験に基づいた話から、教師の学び続けることの大切さと、その仲間・同僚の存在の大切さを学び、自分たちの活動の価値を再確信しました。月に1度ペースの学習会では、冒頭に、メンバーが作成したレポート（略式指導案など）を基に話し合い、授業づくりの悩みを共有し助言し合っています。1月には恒例となっている横浜メディア教育研究会との共同公開研究会を行い、D-proの活動を発信するとともに、D-pro関東の企画・運営のノウハウを積み上げ、今後の研究会の向上へつなげていきます。

藤原直樹（横浜市立西富岡小学校）

▶ 沖縄支部

2017年度の沖縄県マルチメディア教育研究会は、「新学習指導要領を見据えた授業づくり」をテーマにし、「ICTで実現する主体的・対話的で深い学び」「プログラミング教育と教科との連動」という2つを柱に活動してきました。月に1回の定例会。他にも、各教育委員会主催の教職員研修や各学校の校内研修の講師派遣や授業でのタブレット活用についての勉強会である「Teacher's Night in Okinawa」を開催しました。12月には「第23回沖縄県マルチメディア教育実践研究大会」をうるま市立中原小学校で開催しました。研究テーマに沿った4つのワークショップ・プログラミングを含めた算数の公開授業・研究活動報告・総括パネルディスカッションと充実した内容で、盛会裏に大会は終了することができました。沖縄県マルチメディア教育研究会Facebookページ

<https://www.facebook.com/okinawamulti/>

宮城 渉（沖縄県金武町立金武中学校）

賛助会員特ダネ情報

SKY株式会社

www.sky-school-ict.net/

今年も品川で開催します！4/21（土）「タブレット端末活用セミナー・東京」。新学習指導要領に対応したICT環境、活用について、中川先生のご講演や実践発表、対談、パネルディスカッションで考えます！ぜひご参加ください！



スズキ教育ソフト株式会社

www.suzukisoft.co.jp/

この度、社屋移転に伴い、住所や電話番号、サポートセンターの電話番号が変更になりました。詳しくは弊社のホームページまたはFacebookをご覧ください。今後とも、ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



株式会社青井黒板製作所

www.aioikokuban.co.jp/

板書とICTを融合した新しい教室環境を提案しています。黒板の左右中央、授業の内容に合わせて位置で映写可能なスライドレール式プロジェクターや新製品の映像がきれいに映る新色の黒板「映るんグレー黒板」を発売中です。



泉株式会社

www.izumi-cosmo.co.jp/screen/

「まなボード」が新しくなりました！はさむ・書き込む・黒板に貼るに加え今度は透明書き込みシートが交換可能となりました。半分サイズの「まなボードミニ」も加わり、さらに使いやすくなりました。



公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

www.unesco.or.jp/

2018年3月、カンボジアに新しい「寺子屋」が完成です。建設には昨年度のD-pro「寺子屋リーフレット制作プロジェクト」で集まった書き損じハガキの寄付が活用され、銘板には協力いただいた学校名が記載されます。



株式会社ジェイアール四国コミュニケーションウェア

www.collabonote.com/edu/

新商品「まなバケツ」は「主体的・対話的で深い学び」を実現するタブレット端末で有効なソフトウェアです。使いたい時にすぐ使える機能を複数搭載、トライアル受付中です。



公益財団法人理想教育財団

www.riso-ef.or.jp/

当法人は、「はがき新聞」を使った授業の研究と普及に傾注してまいりました。「考える力」「書く力」「伝える力」の涵養に大きな効果が認められ

ています。「はがき新聞」は無償でご提供いたします。

公益財団法人 理想教育財団
RISO EDUCATIONAL FOUNDATION

株式会社バイキューブ

<https://xsync.vcube.com/>

授業支援ソフト「xSync Classroom（バイシンク クラスルーム）」のiOS版（児童生徒機）を今夏に発売予定です。iOS対応の遠隔授業支援システム「xSync Prime Academic（バイシンク プライム アカデミック）」もござ



株式会社ガイアエデュケーション

www.gaia-edu.co.jp/

アクティブラーニング向けのICTファニチャーの企画・製作に注力しております。天板がホワイトボードですので、書くことができます。昇降させて立ち姿勢で学習できるデスク「yaxa」もご好評頂いております。



ダイワボウ情報システム株式会社

www.pc-daiwabo.co.jp/

DISの教育ICT総合サイトは教育ICTに役立つ情報が満載！現場で頑張る先生をご支援します。詳しくは「DIS 教育」で検索ください。



理想科学工業株式会社

www.riso.co.jp/

今年始まった「新聞教材活用プロジェクト」を2018年度も継続します。プロジェクトメンバー以外の先生にもご活用いただけます。フルカラー印刷機・オルフィスをセミナーや研究発表会の資料作成では是非お試しください！



株式会社フルノシステムズ

www.furunsystems.co.jp

タブレットの普及で学校ICTに不可欠な存在となった無線アクセスポイント。安定した多台数接続と電波干渉の影響が少ない事が必須です。画面

投影も可能な動画対応APも合わせて。詳細は弊社URLにて！

FURUNO SYSTEMS

LB技研合同会社

www.lbgiken.com/

TJ-Link（学校向け）の「即印刷」はデジカメやタブレット画像を授業中に印刷教材へ素速く変換できアナログとデジタル融合によるアクティブラーニングを協力的にサポートいたします。
【<https://www.e-globaledge.com/products/infrared/products/tjlink/>】製造販売元はイーグローバレッジ



ヤマハ株式会社

<http://ses.yamaha.com/>

2月に「ヤマハデジタル音楽教材『合唱練習』」を発売します。合唱の練習を効率化し、生徒の主体的な学びをサポートする教材です。詳細は弊社ホームページをご覧ください。【https://ses.yamaha.com/products/digital_chorus/】



株式会社翔泳社

www.shoeisha.co.jp/

すぐに使える！よく分かる！大人気の「ルビィのぼうけん」や「ビスケット」、授業例や実践のポイントなど、プログラミング教育に関する書籍＆教材をどうぞお見逃しなく。



公益財団法人学習ソフトウェア情報研究センター

www.gakujoken.or.jp/

7月27日（金）D-project共催「情報教育セミナー2018」（虎ノ門・ニッショーホール）への参加を予定下さい。文部科学省室長の講演、コンクール表彰式と赤堀東工大名誉教授の講演、中川教授によるパネルディスカッション、全国実践研究発表会、企業展示等を予定。



編集後記

戌年を迎えました。戌年は、十二支のうち11番目にあたり、もう少しで十二の暦がひとめぐりしようという頃で、季節でいうと晩秋に例えられるそうです。これまで時間をかけて育ててきた作物を収穫する時期、「結実」を表す年でもあるのですね。

D-proでも、これまで続けてきた「メディア創造力」育成の取組を、春の全国公開研究会等で形にしてディスカッションをしたいと思います。戌年はまた、次なるステップへの準備の年とも位置づけられています。新学習指導要領の移行の時期に、次なる学びを共に考えていただけるメンバーが増えることを期待しています。

D-proからのメッセージのつまった第7号を、ここにお届けいたします。

（2017.3 吉日 編集長 佐藤幸江）